

2019/01/27

「取税人の祈り」

「自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえ話をされた。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向かうともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人のほうが、前の人よりも、義と認められ、家に帰って行きました。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（ルカ 18:9-14）

■自分を義とする人

「自分を義とする」とは、「自分を正しいとする」ことです。これを最初にしたのは、アダムです。アダムはサタンにだまされた時、神様に対して「私は悪くない。エバが食べるよう言つたのだから。」と言いました。また、妻のエバも同様に、「私は悪くない。蛇が食べるよう言つたのだから。」と答えています。この時以来、人は「自分は悪くない」と言い訳をして生きています。

なぜ私たちは「自分は悪くない」と言ってしまうのでしょうか。それは、人から称賛や同情を得て、慰められたいと願っているからです。人は誰もが苦しみを背負って生きています。たとえ苦しんでいる自覚がなくても、やがて来る死に対してだけはどうすることもできません。そのつらさに対して慰めを求めているのです。

人は様々な困難に出会いますが、その時、人が本当に求めているものは、問題の解決そのものよりも解決によって得られる慰めです。そして、慰めを得る手段として広く使われているものが、「自分を正しいとすること」です。「あなたは正しい」と賞賛されたり、「あなたは悪くない。悪いのは○○だ。」と言ってもらったりすることで、慰めを感じることができるからです。

しかし、求めている慰めが与えられないと私たちは、腹を立てたり、嫉妬したり、恨んだりしてしまいます。人に慰めを求めて、つまずきが起こるだけです。そこで、私たちに本当の慰めを与えるために、イエス・キリストがこの地上に来られました。イエス様は、「私があなたを慰めるから、人に慰めを求める生き方をやめなさい」と言われます。

また、私たちが「他の人々を見下す」のは自分を偉く見せようとするからです。自分を偉く見せることで人の歓心を買って、慰めを得ようとしているのです。「人を見下す」という行為が問題にされがちですが、その本当の問題点は人に慰めを求めているところにあります。

私たちには、誰もが慰めを求めていますから、人から良く思われたいと願うものです。クリスチヤンが気をつけなければならないのは、自分の信仰を武器に人の歓心を買おうとしてしまうことです。あなたは、良い行いができる信仰を見せて賞賛を得ようとしているのでしょうか。これは信仰の悪用と言わざるを得ません。イエス様は、人ではなくイエス様に慰めを求めるように教えておられます。

■パリサイ人の祈り

「パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』」（ルカ 18:11-12）

このパリサイ人の祈りから、自分を義人として人から慰めを得る人の特徴を見出すことができます。

1. 人と自分を比較している

パリサイ人は、「自分は取税人のようでないことを感謝します」と祈りました。人から慰めを得ようとする人は、人と自分を比較します。「人の不幸は蜜の味」という言葉がありますが、私たちは、自分より不幸な人を見ると「私も頑張ろう」という思いになり、慰められるものです。しかし、人から慰めを受けようとすればするほど、神からの慰めを受けることはできません。聖書は、『誰も二人の主人に仕えることはできない。』（ルカ 16:13）と教えています。人からの慰めと神からの慰めを同時に受け取ることはできません。

2. 人と自分を区別している

パリサイ人は、自分とほかの人々を区別しています。人から慰めを得ようとすると人と自分を区別するようになります。神は「裁いてはならない」と教えておられますが、「裁く」という言葉は「区別する」という意味です。つまり、人と自分を区別しているパリサイ人は、神の目の前で罪を犯しているようなものなのです。

聖書がいう「罪人」とは、不安を抱えている人のことです。すべての人が罪人であるとは、誰もが不安を抱えているということです。なぜなら、皆死ぬからです。病気になると死ぬのではないかと不安になります。どんなにがんばっても、すべての人がやがて衰えて死を迎えます。死は、私たちが築いた財産も友情もすべてのものを奪います。誰もこの不安から逃れることはできません。

この不安は、永遠なる神と結びついていないことから生じています。それなのに私たちは、慰めを得ようとして見えるものにしがみついています。人からの慰めを得るとは、見えるものにしがみつき、不安を見ないようにすることです。これが聖書の教える「罪」です。

3. 神と自分との間に人を置いている

パリサイ人は、神と自分との間に取税人を持ち出しました。取税人と比較することで、神から慰めが受けられると思っていたからです。しかし、比較によって受けるのは人からの慰めです。神と自分との間に何か置いてしまうと、それが壁になって、神からの慰めを受け取ることはできません。

私たちは常に何かで自分を囲って守ろうとしています。自分を安全な場所において、立派な肩書、行い、権威、富、服装や持ち物などで人の歓心を買って称賛を得ようとしているのです。パリサイ人は、取税人を使って、自分を立派だと証ししようとした。つまり、取税人を自分の鎧に使ったのです。

しかし、自分を守ろうとして鎧をつけると、神は直接手を伸ばすことができず、あなたは神から遠く離れた者になってしまいます。自分を守るはずの鎧が神との関係を邪魔するのです。

あなたは、断食をしているから、聖書の〇〇を守っているから等、自分の行いを鎧にして、自分はちゃんとしたクリスチャンだと安心しようとしていないでしょうか。「神様、これだけのことができたから、私を義としてください、慰めてください、賞賛してください。」という祈りは間違っていることを聖書は教えてています。なぜなら、神は行いに關係なく人を愛するからです。

律法は私たちを義に導く手段ではなく、罪人だと気づかせるためのものだと、聖書は教えています。それを守ることで立派なクリスチャンだと証しするためではなく、自分が罪人であると気づくためにあるのです。

■取税人の祈り（義とされる祈り）

「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』」（ルカ 18:13）

イエス様は、なぜ取税人の祈りを義とされたのでしょうか。神は、彼の祈りのどのような点を義と認められたのでしょうか。

1. 彼は神しか見ていなかった

第一に、彼は、人々から「遠く離れて」祈りました。宮には大勢の人がいましたから、パリサイ人は、その中で人々の注目を集めながら立派な祈りを捧げたことでしょう。しかし、取税人は人々から離れ、目立たないところで一人で神の前に立ち、自分の罪を隠そうともせず、ただ神様の憐れみを求めて祈りました。

当時取税人と言えば、民族を裏切ってローマの手下になり、不正に税金を取り立てた上、高利で金を貸しては厳しく取り立てる、まさに罪人の代表です。しかし、彼は次のように祈ることもできたはずです。「取税人は私一人ではない。私だけが悪いわけではない。いや、もっと悪いことをしている人だっているのだから、私はまだましなほうです。」

彼はこのように神の同情を買おうとすることもできましたが、そうしませんでした。なぜなら、彼は神しか見ておらず、他の人のことは忘れていたからです。

2. 彼は自分の罪と向き合っていた

この時、彼の心の中には、何としてもこの罪を赦してもらいたいという思いしかありませんでした。

あなたは自分の罪、不安と向き合っているでしょうか。自分の抱える不安をしっかりと見つめると、見えるものに安心を求め、人の慰めを求め、それが得られないと腹を立て、嫉妬する自分が見えてきて、自分がなんと罪深くみじめな人間か、ここから抜け出せるものなら抜け出したいという切実な思いが沸き起こります。その時、人にどう思われるかなどどうでも良くなってしまうのです。私たちの思い煩いの大半は人間関係から来ます。しかし、自分の罪と向き合う時、それが消えてしまうのです。

自分と向き合うと、自分が人の期待に応えようとして、人の目の操り人形となっていることに気づきます。それは、自分を捨てて生きているのと同じです。自分をごまかして生きていかなければならないつらさを慰めるため、人からの慰めを得ようと、また自分をごまかすことを繰り返しているのです。確かに、本当の自分を見つめると、いつ訪れるかわからない死の恐怖におびえ、不安の中で生きている惨めな存在でしかありません。しかし、その事実を認めてしまったら、もう自分をごまかす必要はありません。その時、思い煩いは消えて本当の自由を手にし、神に目を向けることができるようになるのです。

神の前に一人で立った取税人の中にあったのは、どうすれば自分の罪が赦されるか、みじめな自分を助けてほしいという願いだけです。彼はその願いによって、すでに人の目の奴隸から解放されていました。

3. 彼は神の前で一人であった

あなたのことをすべて知っている神の前では、自分を偽っても、誰かと比較して自分の立派さを主張しても通用しません。誰もが神の前には一人でしか立てないです。つまり、一人で神の前に立った取税人は、本当に神の前に立っていたのです。

彼は目を天に向けることもできず、ただ神の前に自分を低くすることしかできませんでした。この時彼が見ていたのは、自分のみじめさだけです。なぜなら、彼は自分が罪人だとわかつっていたからです。しかしこの時、彼は神を見たのです。自分を低くすることによって、彼は神の臨在を知ったのです。その臨在の中で、彼は「神様、私を助けてください。」と呼びました。

人が思わず「助けて」と叫ぶのは、どんな時でしょうか。それは、恐れを感じた時です。本当に神を見たら、ひれ伏し、恐れおののくしかありません。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』という彼の祈りは、彼が神の前に一人でいたことを証ししています。この取税人に対して、イエス様は「義と認められた」と言いました。

神の義とは、神がご自分のところに人を引き寄せるこによって、人を高くすることです。神様はすべての人をご自分のもとに引き寄せようとしてくださっています。神のもとに引き

寄せられた時、神と共に生きるように造られている私たちは、本来の自分の姿に戻り、平安と慰めを得ることができます。

取税人がこの義を受けたのは、自分を低くしたからです。神の義を受け取り、神の慰めを受けるには、あなたを引き寄せようとしてくださっている神の御手を、ただつかむだけです。

これが神を信じるということです。つまり、人は信仰だけで義とされるのです。

どうすれば神の御手をつかむことができるのか、それは、一人になることです。そうすれば、神の差し伸べている御手が見えるようになり、あなたは必死になってそれをつかむことしかできません。この取税人は私を憐れんでくださいと言って、神の御手をつかみました。だから、神様は彼を引き上げたのです。

「あなたがたに言うが、この人のほうが、前の人よりも、義と認められ、家に帰って行きました。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（ルカ 18:14）

■神の慰めを受け取るには

1. 自分の罪と向き合う

取税人が自分の内側と向き合ったように自分の内側と向き合い、自分の罪に悲しみを覚える時、神の慰めを受ける準備が出来ます。自分の罪に悲しみを覚えない人は神からの慰めを必要としません。

多くの人は、罪ではなく、自分をわかつてもらえないことを悲しみ、自分の悲しみは人間関係のせいだと思っています。しかし、人から慰めを得ようとする悲しみは、本当の悲しみではなく、罪の悲しみを人が慰めることはできません。このことに気づくと、本物の慰めは神しか与えられないことがわかります。

罪の苦しみ・悲しみは、この世界に死が入り込んだことから生まれています。この死を取り除くことができるるのは、イエス・キリストだけです。イエス・キリストだけが、まことの命であり、本当の慰めを与えることができるのです。

2. 神の前に一人で出る

神の慰めは、神の前に一人で出た時に得ることができるものです。一人とは孤独であり、沈黙するしかありません。その時、神を思い起こすことができ、神の慰めが見えてくるのです。あなたは様々な人を持ち出して神に訴えていないでしょうか。一人になって神の前に出ることができるでしょうか。人から慰めを受ける手段を失うということは、神の前に一人になれるチャンスです。それが、キリストが背負った苦しみを背負うということです。

3. 自分を低くする

神の前に出る時、自分が罪人であることを知っている人は自分を低くすることしかできません。しかし、その時こそ、神があなたを引き上げてくださるので。こうして私たちは平

安を得、神を愛するようになるのです。多く赦された者は多く愛するようになると言わてて
いる通り、神に愛されていることを知ると神を愛するようになります。

こうして神の慰めを受け、神を愛するという良い循環が生まれます。そのために私たちは、
人から慰めを得る悪い循環を、一度断ち切る必要があります。それは、この世では絶望であ
り、孤独です。絶望や孤独の時、人の慰めに惑わされず、神からの慰めを求めましょう。